

令和5年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会

日 時：令和5年7月27日（木）

13時30分～16時00分

場 所：長野県庁西庁舎109号会議室

## 1 開 会

### ○丸山県民の学び支援課長

ただいまより、「令和5年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会」を開会いたします。

私は、本日の司会を務めます事務局の県民の学び支援課長の丸山と申します。よろしくお願いたします。

最初に、県民文化部の山田部長より御挨拶を申し上げます。

## 2 挨 拶

### ○山田県民文化部長

本日は、令和5年度第1回の公立大学法人長野県立大学評価委員会のご案内をさせていただいたところ、評価委員の皆様には、大変お忙しい中、ご出席をいただきまして、厚く御礼申し上げます。

また、伊藤委員、山浦委員、山沢委員には1期から引き続き4期目、久保田委員、清水委員には今期から、評価委員をお引き受けいただき、深く感謝を申し上げます。県立大学の中期計画の達成に向けて、幅広い視点から貴重なご意見やご提言を賜りますよう、よろしくお願いたします。

今年度の評価委員会は、令和4年度の実績に対する評価に加え、令和6年度からの第2期中期目標・中期計画を策定するにあたって、評価委員の皆様からご意見を聴取する予定です。

スケジュールとしましては、本日を含めて3回の委員会で前年度実績に対する評価をしていただき、9月5日の第3回委員会において、評価結果報告書などを取りまとめる予定です。また、県が策定する第2期中期目標案について、9月5日の委員会で委員の皆様からご意見をいただくほか、来年2月頃、第4回委員会を開催し、大学が策定する中期計画について、ご意見をいただく予定になっておりますので、よろしくお願いたします。

県立大学は開学から6年目に入らる中で、色々な課題に取り組んでおりますが、評価委員会による評価結果を大学や県民に広く共有し、県立大学の教育、研究、地域貢献など取組の一層の充実や課題の改善につなげていきたいと考えております。

委員の皆様方には、大変ご多忙のところ、非常にタイトなスケジュールでの評価をお願いしており、大変恐縮ですが、どうぞよろしくお願申し上げます。

○丸山県民の学び支援課長

本日の出席者を御報告いたします。

本日は、Web で伊藤委員、清水委員が御出席。5名中全員に出席いただいております。長野県附属機関条例第6条の規定により、会議が成立しておりますことを御報告いたします。

3 議 事

(1) 委員長の選任

(2) 公立大学法人長野県立大学の令和4年度(2022年度)業務実績について

○丸山県民の学び支援課長

続きまして、議事に入らせていただきます。

はじめに、議題(1)の委員長の選任に移らせていただきます。

長野県附属機関条例第5条の規定により、委員長は委員が互選することとなっていますが、事務局の提案としては、引き続き山沢委員にお願いすることとしてよいでしょうか。

< 「異議なし」の声あり >

ありがとうございました。委員より異議なしの発言がありましたので、委員長は山沢委員に選任されました。

それでは、以降の議事の進行を山沢委員長にお願いしたいと思います。委員長席への移動をお願いいたします。

○山沢委員長

委員長に任命されました、山沢と申します。

今年度からは新たに久保田委員、清水委員が評価委員をお引き受けいただき、新メンバーでの体制で評価を進めていくこととなります。

委員の皆様には、ぜひ御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

では、議事に入らせていただきます。

本日は、今期初めての委員会ということですので、事務局から、評価委員会の概要及び今年度のスケジュールについて御説明していただくことにいたしましょう。

よろしく申し上げます。

○丸山県民の学び支援課長

それでは恐縮ですが、委員さんに配付してございます資料のうち、「公立大学法人長野県立大学評価委員会の概要について」というタイトルの資料を御覧願います。

1ページ目の「法令上の評価の位置づけ」の表の中ほどを御覧ください。記載のとおり、太い字で「年度評価(毎年度)」と記載がございましたけれども、この毎年度の年度評価をはじめ、各評価につきましては、それぞれ表の右側に記載があるとおり、地方独立行政法人法に定められたものでございます。

次のページの上の表を御覧願います。年度評価の目的や評価方法についてでございます。

上のほうの表の左から2番目の列の「年度評価」に記載のとおり、目的は、「当該事業年度における業務全体について総合的な評価を行うことにより、業務運営の改善・充実に資することを目的とする」としております。

その下の行、「評価方法」としましては、中期目標、中期計画に定められた各項目の進捗状況を確認し、項目別に評価を行っていただきます。

なお、年度評価における評価の基準につきましては、次の3ページ目に記載のとおりでございます。

次に、今年度の評価委員会のスケジュールの概要について御説明をいたします。お手数ですが、配付資料の「公立大学法人長野県立大学評価委員会における評価作業について」という資料を御覧願います。

こちらの資料の1枚目の上のほう、「令和5年度スケジュール」に記載のとおり、年度評価につきましては、本日が1回目の委員会、8月8日に第2回目の評価委員会を開催し、この2回で小項目評価、大項目評価を終えていただく予定です。その後、評価委員会で議論となった項目について、コメントをまとめたものを御確認いただき、評価結果原案を作成いたします。

原案に対する大学法人からの意見の申出を経て、9月5日の第3回評価委員会で令和4年度実績にかかる評価結果を確定いただきます。

その後、9月県議会の前に委員長から知事に評価結果の報告を行っていただきます。これを受け、県では9月県議会に評価結果を報告いたします。

以上が、年度評価に係る評価作業のスケジュールとなります。

次に、先ほど御覧いただいていた資料、「公立大学法人長野県立大学評価委員会の概要」の4ページを御覧ください。

資料の下のほうの4の(2)スケジュールを御覧願います。先ほど部長の挨拶でも申し上げましたとおり、今年度は県立大学の次期中期目標・中期計画を策定する年度となります。このため、9月5日の第3回目の評価委員会では、年度評価に加えて、次期中期目標案に対する御意見をお伺いする予定です。また、年明け1月の末頃、大学法人から県に中期計画の認可申請がある予定ですので、その後、2月頃に第4回評価委員会を開催し、中期計画案に対する御意見をいただく予定です。

以上が評価委員会の概要及び今年度のスケジュールについてでございます。よろしく御願いたします。

#### ○山沢委員長

ただいまの御説明でよろしいでしょうか。

それでは、本題に入りたいと思います。法人から提出がございました令和4年度の業務実績報告書に基づきまして、各委員におかれましては事前に小項目の評価を行っていただきました。非常に短時間でございましたけれども、お忙しいところ評価をいただきましてありがとうございます。

本日は、各委員の評価を基に小項目評価の方向性について御議論いただきたいと考えております。方向性と言っておりますけれども、小項目でございますので、a・b・cという評価をある程度確定していきたいという気持ちでおります。

業績実績評価に関する基本方針、資料2でございますが、評価委員会として評価をつけていきたいと存じます。よろしく申し上げます。

委員の皆様には、各委員の評価及びコメントをまとめました集計表をお配りしてございます。最終的な評価結果報告書や参考資料においては、個別委員のs・a・bなどの評価は公表されません。委員会としてまとめた評価ということになります。ここはひとつよろしくようお願い申し上げます。

なお、委員の皆様の個別評価を記載した集計表というのは、評価の議論の参考としてお使いいただくものでございます。委員の皆様のお手元のみとさせていただきたいので、何とぞよろしくようお願い申し上げます。

小項目の評価でございますが、これについて検討を始めたいと思います。

教育から始まりまして、11の大項目がありまして、小項目は96でございます。皆さんには、まず60項目をできましたら先に評価をお願いしますという御依頼をしてございましたので、本日は60項目ぐらいかと思っております。

限られた時間で検討を行わなければいけないということでございますので、委員の皆様の御了解がいただければ、次のようにしたいと考えております。

一つ、評価が一致している項目につきましては、委員の評価が皆同じであると、特段御意見がなければ短時間の検討、評価が分かれているものを中心に検討したいと。これはよろしゅうございますか。各小項目のコメントは、既に御記入をいただいたコメントや、本日議論をこれからするわけですが、それを踏まえてもっと言わなければいけないということもあるかと思っておりますので、私と事務局で整理して、次回の第2回の委員会で、委員会としてのコメントはこうだということを書きますので、そこで委員の皆様にご意見を賜りたいと思います。1回コメントをいただいたらそれで終わりということではございませんので、ぜひ積極的にお考えをよろしくお願いたします。

集計表の見方ですが、なかなか複雑でございますので、そこを事務局からまず御説明いただきたいと思います。よろしく申し上げます。

#### ○事務局

集計表の見方ですけれども、集計表の左端に番号が振っておりまして、○がついている項目におきましては、法人の評価と各委員の評価が異なっているものとなっております。

このように、評価が異なって左端に○がついている小項目は、96項目中26項目ございましたので、以下の集計表となっております。

#### ○山沢委員長

ただいまの御説明でよろしいですか。もうお分かりになっていると思いますが、1ページですと2に○がついていて、これは右を見ていただきますと、法人はaと言っているけれども、いろいろsもaもあるということで、意見が違いますよということを小項目の番号に○をつけてお知らせしているということでございます。

最初に申し上げましたように、議論としては、私の考えは項目1から順番にやっていきたいと思っておりますので、何とぞよろしく申し上げます。

まず、例えばこういうふうなやり方でいかがですか。

No. 1 を見てください。これは令和4年度計画を見ていきますとカリキュラム・ポリシーについて公表すると、これは大学では当たり前ですが、法人評価としてはaだと。見ていただきますと、久保田委員から、「両ポリシーは、新年度のオリエンテーションで簡単に触れられる等、学生に浸透するよう繰り返し周知されても良いと考える」と、当然こういうことに使われる、積極的に使ってほしいということで、評価としては全員aということですので、コメントもこのようなコメントでaという評価にしたいと考えておりますが、いかがでしょうか。No. 1はよろしいですか。ありがとうございます。

次は No. 2 です。これは真ん中の令和4年度に関わる実績で見ていただきますと、新入生 268 人と学長が1人ずつ会っていろいろ話をするという慣習があります。sが2人おりまして、私と山浦委員ということで、これはsでもいいのではないかと。特に私の場合は、自分も学長をやっています、学生と本当に話ができなかったのも、この学長は幸せだろうなということ思わずsにしてしまいました。特にaでも構いません。

山浦委員、どうですか。

#### ○山浦委員

過去のことを言うと、この項目は最初はたしかsでした。私はずっとsをつけているのですが、全学生と学長が個別にやる努力は大したもので、これからも続けていってもらいたいという意味も込めて、sではないかと思っています。

#### ○山沢委員長

いかがでしょうか。私は、大学側がaと言うならしやうがないかなと思いますけれども、こういういいことはきちんとこれからも継続してほしいというコメントをつけて、それでaという評価でよろしいですね。

#### ○山浦委員

aの委員の意見を聞きたいけれども。

#### ○久保田委員

高く評価したことは書いてあるので、膨大な時間がかかることは分かるので、sでもいいんですけども。

#### ○山沢委員長

No. 2についてはaが多うございますので、a評価ということにします。ただこれは、学長が新入生と直接会って話をするというのは非常にいいことなので、継続するよにということをつけていきたいということでございます。たしかそれは久保田委員もお書きになっていますね。その辺をきちんと書きたいと思います。それを書くということでa評価でよろしいですね。

次は No. 3 です。総合教育科目全てにおいて、オンラインや対面の授業形態にかかわらず、授業でディスカッション、ディベートをいっぱいやるような機会をつくって参加できるようにしているということでございます。これは皆さん、当然であろうということでご

ございます。山浦委員から、具体的にどのように行っているのかという御質問がございますが、これは回答はありませんか。

○事務局

確認中です。

○山沢委員長

大学の回答待ちではございますが、評価としてはa評価でよろしいですね。

次はNo.4です。プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、課題発見、課題解決能力等の実践能力を身につけさせるということでございまして、実際には発信力ゼミというのを、前期・後期と1年間にわたって、16人程度の少人数クラスで行っているということでございます。

大学側としてはaの評価でございますけれども、伊藤委員からbの評価をいただいています。伊藤委員御説明をお願いします。

○伊藤委員

大学のほうで実践的な能力を一人一人に合わせて効果的に向上させるためにということで、1学年16人程度15クラスの少人数という、これは割と初年度から少人数のクラスで行うということを非常に効果的に進めるためには重視していたと思うのですが、どちらかというところクラスの人数が増えてクラス数が少なくなっているという、目標よりも後ずさりしている感じがあるので、実際に評価委員会のa評価というのは、100%以上計画どおり実施ということなので、決して100%以上の実施とは考えられないので、おおむね年度計画を実施している80%以上100%未満というのがb評価なのでbとしました。以上です。

○山沢委員長

その点、前向きコメントという文章になるでしょうか。

○伊藤委員

少人数でなくてだんだん人数を増やしていったって、一人一人の実践能力を高めると言いながら、よりコロナ明けは、学生さんたちが学校の中での親和性などが形成しにくいところで、少人数の効果というのはやはり大事だと思うのですが、ヒアリングの際に大学から対応できる教員が足りないようなお話も出てきていたような気がするのですが、いずれにせよ、数値として中期目標に掲げている以上は、やはり大学としては、学生さんを育成するところを柱に据えているならば、逆に人数を増やしてクラス数を減らすというのは、決して100%達成と思わなかったのでbにしました。

○山沢委員長

皆さん、今の伊藤委員の意見を聞いて、近いお考えをお持ちの方はいらっしゃいますか。

○山浦委員

伊藤さんのおっしゃるのは、毎年人数が増えてきていると、違いますか。少数でやると言っているのに人数が増えるのはおかしいと言っているのではないかと思うのだけれども。

○久保田委員

年度計画と比較すると、実績としては一クラス当たりの人数が増えているということで、そこまでは100%行っていないのではないかと。これは評価基準に沿った評価の方法で、清水先生も、たぶんそういう問題意識があってコメントされたかと思うのです。その問題意識をこの委員会が持っているということを示すためには、あるいはこの評価基準に正しく適用するという意味から言えば、bもあり得るとは思います。つまり何の問題もないと大学のほうに思われてもいけないので。

○山沢委員長

増えているんですね。これは、人数を大学に確認してあります。それで、どうも20人でやっているようですけれども、目標は書いてあるとおり16人程度となっていますから。

○山浦委員

前期が14クラスで、後期が13クラスと書いてありますね。ここだけ見ても減っているけれども、前年度に比べてどうなのか。

○山沢委員長

細かく人数を調べて御回答いただいて、今皆さんがおっしゃった、特に伊藤委員からの御発言のとおりであるということであれば、これは評価を下げるということを次回に提案したいと思いますので、それでよろしいですね。それでは、事務方よろしくお願いします。

次はNo.5です。令和4年度の実績ですが、3年次の通年選択のグローバル教養ゼミを開講して、一クラス1人から10人で実施して30人が受講したと。少ないですね。これで幅広く深い学びの機会を提供したということを行っているわけです。グローバル教養ゼミというのは、名前としては新規性を持たせているということでございます。

評価としては、伊藤委員と清水委員がbの評価です。

すみません、伊藤委員、御説明をよろしく願いいたします。

○伊藤委員

幅広く3年次に開講ということで、これはたしか昨年も同じようなお話があったと思うのですが、やはりこの30人の受講というのが、目標値に対して、a評価でいいのかと。開講したということはもちろんあると思うのですが、参加している学生が非常に少ないというのは、目標に対して効果があるような運営になっているのかということ、開講しているというのは目標値に達していると思うのですが、それが果たして効果的に学生に届いているのかという意味では、もう少しやり方の工夫がここまであってもいいのではないかと思っ

てbです。以上です。

○山沢委員長

清水委員、お願いします。

○清水委員

今、伊藤委員がおっしゃったのと同じようなことですが、せつかくのすばらしい少人数教育を目的とした講座にもかかわらず、受講生が少な過ぎる。ただ、こういう授業計画の予定がありますとか明示されていれば、必ずしもbでなくてもよろしいかと思いません。ただ、受講生が余りにも少ないという点が非常に気になっております。

○山沢委員長

ありがとうございます。清水委員がおっしゃるように、通常昔のイメージの教養科目というと、多くの人数が教員とあるテーマを中心に話し合われたりする機会があったりするといわれています。そういうことが行われていたわけですが、これですと、そういう古いタイプの教養科目とは違って、少人数でというところを狙っていくのでしょうか、その後、興味の範囲とかいうところがどうしても偏った形になって、授業としているいろいろな専門の人が出てきてそのことに関して共通したことを話し合うというイメージから、少し違った意味になるのではないかというおそれはあると思います。その点を心配されているのではないかと思います。

○清水委員

クラス数によっては1人とか2人とかとすると、幾ら少人数クラスとはいえ、少な過ぎるのではないかという懸念を持っております。

○山沢委員長

グローバル教養ゼミの本来の意味が、この少人数教育という形で実現していくのか、現在していると思っているのか、これも確認させていただきます。

○山浦委員

一クラス学生1~10人程度、全8クラスで実施し30人が受講したと。何回やって一クラス何人でやったのか、見ていると0人というのもありそうなので。

○山沢委員長

先生1人学生1人という科目もありますね。それで2名とか、一番多くて10人ですね。そうやって30人が、10名のクラスが一つ、あと20人しかいないから。

○山浦委員

そんなことを考えると、どうなっているのかよく分からない。

○山沢委員長

そうではなくて、学生と一緒に考えて、自分の持っているテーマを学生と一緒に

なって、専門でないところで考えようということが大切なので、その点からすると、この県立大のやり方は意味があるのかという問合せを1回してみたいと思います。それでよろしいですね。

次は No.6 です。令和4年度に係る実績のところを見ていただきますと、必修の英語の授業を、各学生の英語力を勘案して一クラス25人、全10クラス、少人数クラスにより実施したということです。また、英語教員による英語部会を月1～2程度開催して、授業改善や英語集中プログラムの運営のための検討を行うような会をちゃんとやったと。4学期末の TOEIC-IP 実施後には、1年間の指導の結果について情報を共有したと、教員同士だと思えますけれども、というふうなことでございます。

これに対して山浦委員がbの評価でございます。山浦委員、お願いします。

○山浦委員

これはもうずっともめているわけです。前の委員会も同じようなことを言っていたと記憶していますが、cでやっているけれども、英会話教室とかだと1対1でやっているんですね。25人が少人数なのかどうかという判断も、英会話からすると、本来はやはり5人ぐらいではないかと思うんですね。

○山沢委員長

これはそうですね。2年ぐらい前に委員会で議論があり、特に語学の場合25人を少人数クラスと言うのかという議論をしまして、そうではないと言ったのですが、そのときはたしか英語の先生もおいでになって、いろいろ侃々諤々とあったのです。私が聞くには、英語の先生の人数を考えるとこんなものだと。

○山浦委員

こんなことを書いていいかわからないが、予算の関係で、人数が増やせないからどうしても仕方がないと書いてくれれば我々も納得します。そこを正直に書くこと重要だと思いますね。

○山沢委員長

まあそうですね。ただ、英語力についてはついていますね。これは、山浦委員がおっしゃった25人はとても少人数とは思えないというコメントをうまく入れて、それでa評価というわけにはいきませんか。

○山浦委員

いいですけども、これは評価委員の資質とも関わるのではないかと。大学もcとは認めているわけです。相当これは努力しないと、発想を変えない限り中期目標は達成しないかと。

○山沢委員長

英語の授業を担当できる教員の人数を聞いてください。もう人数割りにして、パツと。

それができないのだというの分かるようにしましょう。

確かに5～6人しかいないんですね。普通は教養部があります。ここは教養部がないから。学科のところに張り付いている。英語の先生を増やそうとすると専門の教員を減らさなければいけない。なかなか難しいと思うので。ここは聞いてください。英語の専門の教員が何名いるか。

次は No.7 です。グローバルマネジメント学科でいろいろ履修案内、学生便覧にコースごとにコースツリーを図示した、授業を取りやすくした。食健康学科については、1～3年次で授業開始前のオンラインガイダンスを実施した。こども学科は、各年次で授業開始前にオンラインガイダンスを実施したと、皆さん当たり前だということで a ということでよろしいですね。

次は No.8 です。2・3年次とも履修登録時にゼミナール担当教員が必要に応じて個別に履修指導を実施した。その上で、ゼミナールⅠ、ゼミナールⅡ、ゼミナールⅢともに、20程度。自らの関心のある分野について主体的な学びをした。これはゼミということでございますので、卒業研究等につながっていく、自分の専門につながっていくようなゼミナールでございますが、それをちゃんと2年生、3年生、4年生で説明していると。当たり前ですね。これをやらないと分かりませんからいいのですけれども。

こういうやり方は古いやり方で、たしかグローバルマネジメント学部はいろいろなことをやるんですね。だから、あまりコースを絞ってそういう説明だけではなくて、本当は2年、3年、4年で別々のコースの違うようなゼミを勉強して、4年の最後に卒業研究というぐらいなのは、私はいいと思うのですけれども、そんな余計なことを言うてはいけませんね。

山浦委員も、どんなゼミか分からないから聞いてもしようがないという感じですが、これは普通の話、ゼミナールの話だと思います。よく分からないのですが、専門科目を勉強していく上でのガイダンスをちゃんとやっているというイメージだと思いますので、a でよろしいですね。

次は No.9 です。食健康学科が2年、3年次で臨地実習を500時間設定していますが、これがちゃんとできたということです。特に今年はコロナのことがございましたので、500時間を確保したと書いていますが、これは普段ならば普通、当然やらなければいけないことです。ということで、当然ということで a でよろしいですね。

次は No.10 です。専門指導の話です。これはこども学科での専門指導をどうしたかと。2年次が幼稚園、3年次が保育所実習、施設実習、それから4年生になると卒業研修ですけれども、その専門によって幼稚園への教育実習等、あるいは施設実習と、これはこども学科の専門指導をこうやりますというガイダンスでございます。こども学科は、県立短期大学のときからずっと県内とつながりがございますから、ちゃんとしっかりした行き場所を持っているということで、確保したということだと思います。a でよろしいかと思いません。

次は No.11 でございます。これはソーシャル・イノベーション研究科、修士課程です。平日夜間は全てオンライン授業とするとともに、土曜日に対面授業とオンライン授業をそれぞれ隔週とすることで、特に遠方の社会人学生でも受講しやすい環境を整えたということでございます。あとはアンケートをやっているわけです。

伊藤委員はbという評価ですが、伊藤委員、理由をお願いいたします。

○伊藤委員

No.11と12をbとさせていただきました。中期計画そのものは、どのような研究科としてどんな人材を養成するかとなっていますが、年度計画の立て方も課題だと思えますが、ソーシャルイノベーターの養成とか、リーダーの人材養成を挙げていますが、初年度の計画は、学生の受講しやすい環境を整える、アンケート・ヒアリングの実施。これは大学院のある意味設置前の計画であって、実際の初年度に研究科において、オンラインにしました、対面とオンライン隔週にしました、アンケートを実施しましたというのは、大学院の実績としてふさわしいのかというと、当たり前環境を整えただけじゃないかと、今のこの時代の中で、大学院受講するとしたら、これは全く普通の当たり前の環境設定で、特段何かしたというほどの実績ではないと思ってしまう。

なので、100%達成したとは、計画の立案そのものもあれかもしれないですが、受講しやすい環境を整えるということが、もうちょっと内容的な部分で、講義内容ですとか、どういふような講義形態を取ったとか、もう少し内容に資するものがあったらいいのかなという事は思いました。

同じ環境を整えると言っても、もう少し、例えば単純に、学生間の授業実施というよりは、グローバルなディスカッションを世界各国とつないで行ったとか、研究科にふさわしい何らかの仕組みが出ていけば評価が変わってきたかと思うのですが、単純にこのNo.11と12はそれだけの内容なので、社会人学生が入っているということでは、最低限の環境を整えただけと私には思ってしまうということです。以上です。

○山沢委員長

ありがとうございます。清水委員はaで御疑問の点を書かれています、御説明いただけますか。

○清水委員

私はそれほどマイナスの評価ではないのですが、リソースが限られている中で、これだけの人数の大学院生、しかも社会人の大学院生を抱えて、アンケートを取りながらよりよい大学院運営をしていこうという意思が見えるなど、そういう感想です。

○山沢委員長

どうでしょう。私のほうから、この研究科にオンライン授業とオンラインでない授業をやるつもりだったのでしょうから、そこで一つの例として、オンライン授業はこうやった、オフラインであればこうしたかったのにオンラインでこうしたと、こういう差があるけれども、その差を研究科の学生がどうアンケートで答えているかということ、1回か2回の講義を例にして聞いてみます。

おっしゃるように、ただ社会人大学院生だからオンラインで楽にしたということですかね。それはないですね。そこをちゃんと聞いてみます。それで評価をしたいと思います。

次はNo.12です。これは健康栄養科学研究科です。平日夜間は全てオンライン授業にす

るとともに、土曜日開講も社会人学生の予定に可能な限り配慮した日程を組むことで、受講しやすい環境を整えた。研究科生からは、進学理由等に関するヒアリングを行った。

これは同じようなことを聞いているので、伊藤委員の意見は、たぶん上と同じですね。

#### ○伊藤委員

この間のヒアリングに参加させていただきました折に、研究について各学部長がそれぞれの教授の先生方と個別面談をされて、どのような研究を行う方針であったり、計画であるか御相談されているという話がありました。そういう意味で言うならば、もうこのNo.11も12も、アンケートというよりは学長先生が新入生240人以上と面談しているのに、限られた大学院生ならば、私はオンラインでも個別面談ができるのではないかと思います、人数的には。そのあたりアンケートを取りましたとか、進学理由のヒアリングではなく、研究に対する計画やどのようなことをこの研究科でやりたいのかということの志望理由というよりは研究目的みたいなほうでお話を聞くほうが、私は大学の新入生のアンケートと大学院の研究科で入る方では目的が異なると思っているので、そういう意味で大学の取組が大学院生に対してとは感じられなかったもので、両方ともそういうふうに行っているというところでございます。以上です。

#### ○山沢委員長

分かりました。やはり今おっしゃったように、この間のヒアリングのときに研究科長がおっしゃっていたようですが、そこを確認いたします。そういうことであれば、授業の中で院生と教員の個別面談だってオンラインでできるじゃないかと。そういうふうなやり方とか、そういう方法まで進展させることは考えたのかということも聞いてください。

次に参ります。No.13です。これは海外プログラム説明会を何回かちゃんとやりましたということでございます。ちゃんとやったということですが、山浦委員から、意向調査の結果はどうなっているのかということが書いてあります。海外渡航に関する意向調査を、6月に全学科1、2年次を対象に実施したということですが、どうなったかはないですね。海外プログラムの説明会ということですので、きちんと各学科でそれぞれ複数回やったということで、aだということでございます。これはaの評価でよろしいですね。

次はNo.14です。グローバルマネジメント学科及び食健康学科では2年生の学生、こども学科については3年の学生で、ゼミの単位または研修先単位及び学科ごとのより具体的な事前学習を実施しているわけですが、それについて、事後学習を実施するとともに、その実施改善を見据えたアンケートを実施したということです。

清水委員、この御質問の内容をお教えいただけますか。

#### ○清水委員

世界情勢による影響で航空運賃が非常に高くなっているとかで、実際に海外に行って研修をするということが非常にハードルが高くなっている状況だと思うんですね。そういったところでオンラインによる海外プログラムを実施しているということですが、今後も特にグローバルマネジメント学科においては、実際に異文化を体験するとか、外国に行くということが非常に重要だと思いますので、それに学生が参加できるような、そういう施策

について検討していただければという私の希望を書かせていただきました。

○山沢委員長

ありがとうございます。ぜひコメントにつけたいのでよろしくをお願いします。評価としてはaということですのでよろしいですね。

次はNo.15です。令和元年度の実施経験を含め、現地のプログラム内容や生活環境等について、説明会、資料等で学生に適切な情報を提供したということですのでございます。これは現地実習を視野に入れて、持っているデータでいろいろ学生に説明をしているということですのでございます。これはaでよろしいですね。

次はNo.16です。eラーニング等のオンラインシステムを活用しながら、全学生に対して英語運用能力を高める科目群と、英語コミュニケーション能力を高める科目群の授業を並行して実施し、全学生の英語力をバランスよく向上させたと言っています。これは難しいですね。

久保田委員、お願いします。

○久保田委員

私はaにしたのですが、それぞれ英語の能力の不足しているところが、本人がきちんと把握しているかどうかということで、私の子供は中学生とか高校生ですけども、eラーニングというか、ネット経由の英語の学習みたいのをやるのですが、問題が出されて、それが間違えると同じような傾向の問題が出されるなどして、不足しているところはどんどん能力がつけられるような形のeラーニングですが、そういう教材なのかどうかも分からなくて、そういうことも含めて、本人が自分の不足している英語力をきちんと把握しているかどうかということが疑問に思えたので、ちょっとコメントいたしました。

○山沢委員長

その辺は聞いてみましょう。お願いします。ただいまの御質問は、そういうものなのかどうか問合せをします。ただ、評価としてはaかなという感じでおります。その答えによって、全然違っていたとしたら考えなくてはいけないと思います。一応aという形にしたいと思います。

次はNo.17です。3、4年生に対して計画どおりの科目群を開講したということです。これは高度なリーディング能力とライティング能力を目指す科目、あるいは高度なコミュニケーション能力を養う科目、こういうことを教養科目も含めて3種類開講したということですのでございます。

伊藤委員、久保田委員からbの評価を得ております。

久保田委員、お願いします。

○久保田委員

TOEICの評価は1年と2年で行われて、3、4年はしないのですが、その英語集中プログラムの履修後も継続的に英語力の向上を目指すというのはこの題目なので、受講人数が少ないというのと、3年生はいろいろ専門的なことをやって、グローバルマネジメ

ント学科以外はそれなりの資格などを視野に入れているので、この辺はあまり積極的にならないのも、自分が学生だった頃を考えれば仕方がないという面もあるのですが、それにしてもやはり少ないということでbにしたということです。

○山沢委員長

ありがとうございます。  
伊藤委員、お願いします。

○伊藤委員

久保田委員がおっしゃっていたとおりだと思います。1、2年で集中プログラムをされて、非常に御努力されて点数を引き上げてきてはいるのですが、3、4年生になると実務的な英語能力という意味で言えば、現場に入るためにも重要な時期になると思うのですけれども、やはりそのあたりに対して、開講してもなかなかそこに対して参加数が伸びないということについては、もう少し学校全体の考え方として、どういう人材を出していくのかというところとしては、長野県の人材をどう育てていくかというところかと思うので、もう少し、これでいいと、これでaで100%達成していますというふうに評価していいかというところで迷ってbとさせていただきました。以上です。

○山沢委員長

ありがとうございます。私としては、学生が自分で学ばなければいけないんだと、学ぶところこういうところが得だとか、そういうことも教えないと思うんですね。ただただ英語とはこうだと言っているだけでも駄目なので、その辺がよく分からないですね。

久保田委員のコメントに必要なことが書いてありますが、これを問い合わせることにします。それによって決めたいと思います。

次はNo.18です。言語教育センターにおいて、学生の英語運用能力を向上させるため、TOEIC オンライン講座を開講したと。2月、3月にかけて4時間×4日間、22人の受講ですね。学生の英語使用の機会提供として、英語教員により、市内をハイキングしたりということをしたということです。

清水委員、ここに書かれておりますコメントの御説明をお願いします。

○清水委員

ここに今、実際に行ったイベントと、それが終わった後に学生に感想を聞いたということが書かれていますが、それをさらに活かしたイベントを翌年度に開催していただければ、ますます学生がモチベーションを高められるのではないかと考えてこのようなコメントをさせていただきました。事実だけが書かれているので。

○山沢委員長

山浦委員は、参加人数が22人と少ないことを御指摘されています。これは確かに少ないです。

○山浦委員

これは今までも英語についてはいろいろ議論があって、先生方をやたら評価委員会が責めまくっていたというイメージがあって、そう思ってやってきたと。先生はこれだけ責められるけれども一生懸命やっているのだと思います。やっているけれども、どうも学生がそういう危機感がない。そういうことじゃないかと私は思います。下のところに学生の意欲喚起を促すと書いていたけれども、これは要するに何点であっても卒業ができてしまうんですね。多少そういうのも成績に反映するとどこかに書いてあったけれども、きちんとやっているところは落第させていますね。

英語が最低600点、平均700点と書いてあるので目標を変える必要があるのかもしれないけれども、学生が逆についていけないことが大きいのではないかと、この頃は思い始めているんです。

○山沢委員長

事務方をお願いします。このNo.17、18で、言語教育センターとして学生の英語を学びたいという意欲にいつも注意を払っているのかどうか、その辺をどう考えているのか、どうも学生の英語を学ぶという意欲が高いとは思えない、その点はどう考えるか、そこを一つ聞いてみてください。実はこれは本質ですね。

それでNo.19に行きますが、皆さん意見が一致してcです。本当はこういう話をきちんとしなければいけないのですが。

○山浦委員

前に私が、これは目標点がいくら何でも高過ぎるのではないかと、現実からするともっと下げたらどうですかという質問をしたときに、金田一学長は、そうは言っても決めたことだからきちんとこれから努力してみます、してみたいんですと答えた気がするんですね。それはそれで意欲的でいいと思ったのですが。

○山沢委員長

ともかく19はcということで、このコメントはきちんとつけたいと思いますのでよろしくをお願いします。

○伊藤委員

すみません。特に18の部分ですけれども、先ほど清水委員が、グローバルマネジメント学科でコロナによって研修プログラムに参加していないお話があったのですが、ここまで実施できていない学年がございますね。ある意味、そういった学年に向けてなぜ危惧しないのかとか、海外プログラムに参加できていない子たちが、3年生、4年生でいると思うのですが、そうすると17や18というのは、ある意味海外プログラムをオンラインで行った層に対して、きちんともっと、言語習得や海外体験が十分なプログラムができなかったという場合に、今学校で設けているこういった機会を、そういうものの中に組み込んで展開してもよいのではないかと思います。

令和4年度の海外プログラムを海外渡航で実施されなかったグローバルマネジメント学

科においては、それ以外の、例えば No.18 のところでも非常に参加率が低いということは大変もったいない。ものすごく英語の先生方は頑張っているし、ものすごく先生方はいっぱい努力をされているのは今までヒアリングさせていただいて痛感はしているのですが、じゃあ学生がそこに参加するかというところに対して、オンラインでしか海外プログラムをやっていないければ、もっともっとうこういう仕掛けとリンクさせてもいいのではないかと、これはこれ、それはそれみたいな形が非常にもったいないなと思っています。

ですので、海外研修プログラムともっとリンクさせた形で言語教育センター等のプログラムの活用をされたらどうでしょうかというところを加えていただければと思います。

#### ○山沢委員長

おっしゃっているのは、言語教育センターでの語学教育ということと、語学教育にかなり直接結びついているような各学科が実施しています海外イベント、その連携が少ないですよね、確かにそうですね。おっしゃるように、例えば英語なら英語を学ぶと言ったときに、言語教育センターで教えるだけが授業ではなくて、行かせてしまったほうが一番勉強になるわけですから、そのときにこういうことを学ぶ、あるいは行くためにいろいろ準備をするという、それも英語でやるのでしょから、そこもやらせるという。それを書くとな大変かな。

#### ○伊藤委員

私は a 評価でも全然構わないと思うので、その辺をコメントに入れていただければ。

#### ○山沢委員長

コメントで、今おっしゃったような言語教育センターでの語学の教育、学生たちが自分たちの実習の中でやる英語の学びがどうやってつながっているのだと。それをきちんとつなげていくような、そこを見たらいいのではないかと書くを書きます。

次は No.20 です。入学前のプレースメントテストの結果で 10 クラスに分けてちゃんとやっていると言うのですが、ここは私も a にしているのですが。

清水委員がおっしゃっているように、結果をどのように示したら学生のモチベーションが高揚したのかと、そこはぜひ聞きたいところですね。これは聞きます。

No.21 です。これは「入学者の受入れ」という大きな項目です。最初は広報推進員が中心となって、入試に関する県民の進学希望や県民の枠の設定等、随時ホームページにきちんと掲載しているということでございます。これは当たり前だと思われませんが、実は最初の頃はホームページでこういうことはやっていなかったのです。それでホームページでやるようにという指示をしたわけです。その後ちゃんとやるようになっていくということでございます。そういうことでやることはちゃんとやっているということ、評価は a ですよ。いいですね。

次は No.22 です。入試広報活動を戦略的にやろうということでございます。高校での説明会を何回やったというようなことがずっと書いてございます。清水委員から長いコメン

トをいただいています。  
清水委員、お願いします。

○清水委員

オンラインでは実際に大学へ来られない人が参加できるメリットがありますし、他方、対面であれば直接大学関係者に会ったり、大学を見ることで受験生の志望度が高まることもあるかと思います。こういうタイミングでオンラインを使用した広報活動も行って、対面とオンラインとうまくバランスを取って、より効果の高い広報活動を展開してもらえればということでこういうコメントを書きました。

○山沢委員長

県内の高校生に対して、実際に会って、オンラインでなくて対面実施がやはり効果が高いですね。その辺は高校のほうも希望するわけでございますが、もっと広く人材を集めるという意味で、オンラインだけの個別的にいろいろ相談ができる、そういうことに尽力してほしいというのは同じでございます。その点を書いて、aという評価でよろしいですか。

○清水委員

若い人は、オンラインと言いましてもホームページに訪れて大学の情報を見るということだけではないので、SNSなどを通じて大学や学生の活動などを見ていただければと思います。

○山沢委員長

SNSとか新しい情報手段というところにも積極的に前向きに取り組むようにということをごコメントで入れたいと思います。よろしくをお願いします。

次はNo.23です。コロナ感染症予防対策と大学入試の関係でございます。これは文科省で決められたとおりやるということでございましたので、特に決められたとおりきちんと公表もしつつやったということでございますので、aということでよろしいですね。

次はNo.24です。これはソーシャル・イノベーション研究科ですけれども、その研究科の説明、個別相談を6回ぐらいやったということです。これは別に当たり前だと思いますが、山浦委員が、期待レベル以上の学生を確保できたかと聞いています。これは非常に問題で、本当は、私が考えるのは、特にソーシャル・イノベーション研究科の大学院生などは、長野県内の市町村の若い職員などが来てくれるといいですね。そういうところにきちんとアプローチしているのかというのを一番聞きたいです。それもコメントに入れるということで、aでよろしいですか。

次はNo.25です。これも大学院の研究科で、研究科の案内のリーフレットのことだと思います。個別に広報活動を展開したと。1期生の実績がある2市からは個別の説明会をやってくれという話も来たということで、2市だけではなくて全部回ったらいいのですが。これはaでよろしいかと思います。

次はNo.26です。健康栄養科学研究科で、どういう院生を募集する広報活動をしたかと

ということです。伊藤委員からbの評価をいただいています。

伊藤委員、bについてコメントをお願いします。

#### ○伊藤委員

ソーシャル・イノベーション研究科に比べまして、健康栄養科学研究科は、前回私のほうで質問させていただいた大学紀要のことも聞かせていただいたのですが、研究に対してというよりも管理栄養士養成学校みたいな感じのところに非常に注力している感じがあって、研究についてどのくらい体制とかを進めていこうとされているかというのが今のところ見えないなと思っています。

その中で、実際の大学院の入学者の確保のためには、中期計画にも、または年度計画にも、積極的な説明会の開催とか、関係機関への訪問説明とか書いてあるのですが、非常に実績としては、個別の広報活動と情報サイトへの広告掲載、これがaに値するか、100%以上の実施と言えるのかというところでは、もう少し説明会の実施や個別の広報活動ということはあるかもしれないのですが、ターゲットを明確にした広報活動という意味では、もうちょっと計画性やどういった方々に対してどういうふうな人材を育てる研究科であるかということに対する広報活動についての情報サイトへの広告掲載だけでなく、もう少し深めてもいいかなと思ったものですから、aとは言えないのではないかと思います。以上です。

#### ○山沢委員長

ありがとうございます。研究科の考え方をお聞きしないといけないですね。聞いてください。研究科に入学した後研究能力をつけるわけですが、その研究能力を展開できる人材として社会から要求されるということを中心に考えた上で募集をします。学部の学生のちょっとした一歩進んだ形ぐらいしか考えていないのでは。今、食の分野はなかなか広く人材を募集していますから、いろいろな面でいろいろなところで、少し広く能力の展開を図れるような、そういうことも考えてほしいけれども、どう思うかと聞いてください。ということで、これも問合せをします。それを聞いてからということにします。

次はNo.27です。他大学からの編入です。これは結果的にグローバルマネジメント学部編入生が入学したということでございます。県内から来たんですね。応募学生があって、きちんと入試もしたということでございますので、aという評価でよろしいですね。

次はNo.28です。コンソーシアム信州の単位互換、2科目100名を超える履修者が受講。これは何かというと、長野県の大学が他大学に向かって単位互換の科目を公開しています。実は私もやったことがあるのですが、例えば私は電気ですが、電気のことは他大学は要らないのですけれども、でも聞きに来たりしてくれているのです。やはり基本的なことを知りたいからと。そういうことで、もう随分前からやっていると思いますので、こういうところに新しい大学として、ぜひ単位互換をきちんと決めて、学生にも講義を受けさせてほしいと。もっと言いたいのは、教員もここで講義をしてほしいということです。aということでよろしいかと思います。

次はNo.29です。「教育の質の向上」ということです。成績評価にGPAという、総平

均点というやり方ですが、GPAを用いて学習成果を可視化して、学期ごとにGPAを学生に周知したと言っています。これはまずGPAで成績評価をするためには、成績の評価値というのを自分で教員が決めるのです。何点以上がA、B、Cと決めてやるわけですが、それで自分の受け持っている講義がこうであるという全体が分かると。そういう中で、学生は、あなたはこういうところにいますよということが全部分かるようになっているシステムです。

言わせていただきますと、これが一番役に立つのは学生ではなくて教員です。教員が自分の授業を点数化すると、ほかの人がやっている授業と比べることができます。「俺の講義は難しいから分からないんだ」と若い頃は威張っていたのですが、やはりそういうのは駄目なのです。ちゃんと理解してくれる人が多いとすごくうれしいわけです。教育の質の向上ですから、教えるほうがちゃんとやっていただきたいということです。やっているようですからaということで。

次はNo.30です。予習復習等についてということで、皆さんすごく不思議だと思いますけれども、清水委員は分かっていると思いますが、今の大学生には予習・復習のやり方をちゃんと教えるのです。それをちゃんと前に渡しておくのです。それを見てちゃんと予習・復習をします。そんなのは予習・復習でも何でもないので、やることになっています。それがちゃんとやるようになったということで、清水委員、このコメントの御説明をお願いします。

#### ○清水委員

前半と後半で別の話になっているのですが、前半に関しては、新しいシステムを導入したことに関連して、新しいシステムを使うようになることによって教職員は負担になることもあると思いますが、上手に活用している先生や職員の方がいらっしゃると思いますので、それをベストプラクティスとして、FDやSDで共有すれば、使うのに慣れていない先生ももっと使えるようになるのではないかと感想を持ちました。

後半に関しては、授業改善アンケートに関しまして、受講者数が多い授業は満足度も回収率も低くなりがちだと思うのですが、それにしても10%ぐらいグローバルマネジメント学科は回答率が低かったということです。上がるような工夫が求められるのではないかと思います。以上です。

#### ○山沢委員長

ありがとうございます。評価はaで変わらなく行きたいと思いますが、今のコメントのグローバルマネジメント学部の回答率の低さ、他と比較して、これは一応聞いてみてください。質問しましょう。ただ、評価としてはaということです。

次はNo.31です。外部講師により「オンライン授業におけるアクティブラーニングの技法と教師の役割」をテーマにFD・SD研修を実施したということでございます。オンライン授業、対面授業、ハイフレックス授業を併用して、授業形態にかかわらず学生が主体的に授業に参加できるよう、プレゼンテーションやディスカッション等を導入したと言っています。授業改善アンケートの項目、「教員は双方向的な授業を行う工夫をしていた」の全学平均値は4.4となったということです。4.4が高いのか低いのか分かりませんが、

改善できていると。

伊藤委員、コメントをお願いします。

○伊藤委員

これはどちらかというと、FD・SD研修で、清水先生がお書きくださったように、参加人数を事前に学校から資料としていただいたところですが、たしかこの研修参加者が半分程度で非常に少なかったところがあって、学校としてはこれを一つの軸にして進めていこうと考えて研修も実施しているというところに対して、先生方の積極的な研修参加がないというところは、やはりこういった技術とか知識はバージョンアップしていかなければいけないのではないかと私は思ったりしていたので、そのあたり、ある程度慣れている先生は出ないのかもしれないのですけれども、やはりFD・SDの参加率も含めて、もう少し積極的にこういった技法について学生に導入していくということを、先生方のほうが積極的に進める姿勢が必要なのではないかと思います、その参加率の低さからbとさせていただきました。

○山沢委員長

清水委員、お願いします。

○清水委員

私は評価はこのままでいいのですけれども、やはり参加率が低いとか、先ほどの小項目と同様ですが、すごく上手にできる人とすごく苦手な人がいると思うんですけれども、うまくやっている人の知恵をみんなで共有することができれば、全体としての底上げになるのではないかと思います。以上です。

○山沢委員長

いずれも、FD・SDでできるのだという、そこは非常に重要なところですが、ではそのFD・SDというのはどのぐらいの教員が出ているかということは、この大学の問題のところではNo.34を見てください。FD研修ですが、8回やったけれども、1回以上参加した人は全員ですが、各回の参加人数を聞くとびっくりするぐらい少ないです。そういうことからFD・SDの研修の大切さが教職員に浸透していないというのはあると思います。

そういうことで、私としてはNo.34はbの評価で、少なくとも駄目だという話、これは何回か出てきます。それと同時にNo.34で少ないというようなことが指摘されるが、その点の対応をきちんとNo.31ではやってくださいねというコメントを入れたらどうかと思います。それでいいでしょうか。

それで、No.31は評価はa、しかし先ほどのコメントを入れるということで、No.34はbの評価で、これは各回の参加人数が入りますから、それを見ると分かりますので、それで落としてbにしたいと思います。

久保田委員、山浦委員、このNo.34のbはよろしいですか。

○山浦委員

いいですよ。

○久保田委員

はい。

○山沢委員長

では、繰り返しますけれども、No.31はa、コメントに厳しいものを入れる。No.34は評価はbと。

次にNo.32に参ります。令和4年度入学者からカリキュラムを変えたんですね。グローバル教養ゼミというのをやったということですが、これもよく分からないですね。グローバル教養ゼミというのをそもそもどう考えているのかは、先ほど質問するようになっていきますので、そのことはコメントに入れたいと思っています。一応評価は皆さんaということですから、aの評価ということでここはよろしいですね。

次はNo.33です。ソーシャル・イノベーション研究科、健康栄養科学研究科共に設置計画を着実に履行するために必要なことをやっているということ。その設置計画の着実な履行ということになっています。

これはaの評価といたします。先ほど申し上げましたが、No.34はbの評価です。

それから、No.35です。学生に対する授業改善アンケートを学期ごとにやっている。それをちゃんと処理しているということですが、清水委員から、ほかの学科と比較してグローバルマネジメント学部の回答率が低いけどどうしてかと。これはアンケートではないかということですが、これは聞いていますか。

○事務局

これは確認中のところです。

○山沢委員長

これは確認してください。グローバルマネジメント学科の学生はしっかりしているのかもしれないから。

○事務局

先ほどの30番も同じところですね。

○山沢委員長

同じです。清水委員の御疑問のことを聞いて、コメントでちゃんとつけたいと思います。それでaという評価でよろしいですね。

次はNo.36です。これはFD活動、ファカルティー・ディベロップメントの一環として、教員が相互に授業参観をするという方法です。グローバルマネジメント学部において、10月後半から、一部この授業参観を呼びかけ、教員のみならず職員も参加可能とした上で意見聴取を行った。発信力ゼミについては、教員間の意見交換を随時と。この発信力ゼミで、

実はそういうことをやっていたのですが、前から発信力ゼミという授業だけではなくて、ほかの授業でも教員の相互参観を行ったかどうかということも言っていたその結果として、一つ始めたというだけです。

清水委員がおっしゃっているように、これは具体的にどういう科目だというのは知りたいですね。

#### ○清水委員

回答はいただいた記憶があるのですが、一部という表現はあまり望ましくないのではないかと思います。授業参観に適さない科目を除いて、といった表現としてはよろしいかなというのが私の感想です。もう一点、対象とする科目を教員が自己申告で決めるというような表現ではなく、授業参観に適さない科目以外は一律公開するという立てつけにした上で、教員からの申告によって、非公開にできる仕組みにしたほうが望ましいのではないかと思います。以上です。

#### ○山沢委員長

ありがとうございます。そのコメントを採用させていただきたいと思います。そういうことでaということによろしいですね。

余分な話を私からさせてもらおうと、私も清水委員と全く考えが同じで、実は、信州大学の工学部でこれをやっていたことがあるのです。ただやっていると言うと、本当にやっているのかとか、ぐじゃぐじゃになってくるのです。だからもうやっているのだから聞きたければ聞きに来てと、ただし聞いたというのは言わないでねとか、そういう感じで、そういうネガティブよりも、ほかのも聞いてくれたというプラスのほうがずっと大きいと考えて、そんなふうなことをやった経験がございますので、よろしいかと思います。ありがとうございます。

次はNo.37です。これは新型コロナウイルス感染の防止ということで、1年生全員入寮が基本ですが、半数入寮としたということで、1年生133名、上級留学生は3名ということでございます。方法としてうまくやったのでしょうから、これは評価aということにします。

次はNo.38です。キャリア教育の一環として、3回ほど珍しいイベントをしたということです。これはどこでやったかというところ象山寮というところに1年生が入っているわけですが、半分とはいえ、133名入っているわけですが、その学生たちを教育してこうと、大学の教育だけではなくて、寮の中で昔我々より先輩が寮で人間教育を受けたような、それに近いような人間教育ができればということも初回から学長が考えて、象山未来塾というのをやっております。その象山未来塾は、今までいろいろ活発にやっていますが、今年は3回ほどやったということでございます。ちょっと参加人数が少ないですけども、133名のうち1回は22名、第2回は12名、やっと1月に50名ということで少し少ないですが、これは絶やさないとすることが必要だということであろうと思いますので、評価としてはaとしたいと思います。よろしいですか。

#### ○伊藤委員

よろしいでしょうか。評価はaで構わないと思っております。ただ、キャリア教育その

ものはキャリアセンターが相当きちんと進めていらっしゃると感じています。当初象山未来塾は、安藤理事長がソニーにいらした経験も踏まえて、イノベーションというのをもっと真ん中に置いて、自分のキャリアを絞り込んでいくようなキャリア教育的な、就職へ向けての視点ではなくて、もっと豊かな人間性とか、グローバルなイノベティブな視野を持っていくというような視点があった気がします。

昨年も2回開催ぐらいで、コロナもあったと思いますが、県立大が頑張っているのは分かりますが、ちょっとずつ特色のようなものがそぎ落とされていってしまっているような印象があってとても残念に思っています。

ですので、象山未来塾を始めようと思った当初の理念というのに改めて立ち返られて、キャリア教育というような形よりは、もっとイノベティブな未来塾ということに対して発信していただいたほうが、学生さんの参加がより促されるのではないかと感じております。もしよければ、今の一部でもコメントでおつけいただければと思います。

#### ○山沢委員長

ありがとうございます。今おっしゃられたことは大賛成ですので、事務方がコメントを送りますから、それを直してください。それをつけますのでよろしくお願いします。本質です。そのとおりです。ありがとうございます。

次はNo.39です。寮の共同生活をより良くするためのいろいろな工夫でございます。一つは、ユニットリーダー会議を開催した、寮生が社会貢献活動を行う学習プログラム、寮生が行う学習プログラム、サービスマーケティングとして、長野NPOセンター提供の地域まるごとキャンパス、地域の辺りでいろいろなことをやるのですが、おみこしを担いだりいろいろなことをやっていますが、そういうことに寮生12名、寮生以外の学生が16名の28名が参加したと。少ないですけども、そういうことです。

これは別にやっているのは同じですね。本当にルールを変更したのですか。やっているのは同じではないですか。ルール変更がどういうことか聞きます。

#### ○事務局

これは確認が取れています。どういう部分をどうしたか確認が取れていますので、在寮確認、門限があるので打刻のルールを変更したとのことでした。

#### ○山沢委員長

ルールの変更ということですが、どういうことかというのと、寮生の要望を踏まえて、在寮確認のルール変更を行ったと。変更前は、在寮確認のカード打刻を20時から22時の間に行うルールとしていましたが、翌日の実習のため早く就寝したい、当該時刻にアルバイトで外出したい等の要望を踏まえ、18時以降に打刻するというルールにしましたと。寮の生活で今までどおりこういうことをやったというだけですね。すみません、もう一回問い合わせます。

次はNo.40です。レジデント・アシスタントというのは寮生をきちんとコントロールするというか、守ってやる上級生ですね。レジデント・アシスタントとして、令和3年度寮生である3名の上級生が1年生を生活や学習面で支援したということでございます。

では No.40 は評価を a とします。

次、No.41 です。地域の企業、NPO 法人や市町村とのプロジェクトや課題に対して、学生が自らの問題意識に基づいて主体的に参加することを促すようなことが大学の学びを深める学習プログラムで実施したということで、やったのはソーシャル・イノベーション創出センターというところ。地域貢献を主にやっているところ。キャリアセンターも一部やっていますが、そういうところが、今言ったような、地域の企業や NPO 法人や市町村などとプロジェクトを組んで、いろいろ学生を使って学生の教育になるもの、それが結局社会のためになるというプログラムを幾つかやったということでございます。

○がついていますが、王滝村との連携協定、それから商店街活性化マルシェ、これは軽井沢ですか。学生が理事長裁量経費を使ってやったことが、若者等が集う場「ついたちの会」の主宰とか、林業ビジネスのつながりと循環を可視化する取組の実施とか、学科のゼミでは、学生としてはグローバルマネジメント学科のゼミで、県内酒蔵などと連携したお酒プロジェクト、食健康学科のゼミでは、長野市と共にジビエ料理のメニュー開発、それからこども学科では、飯綱町と連携し親子との交流活動や子育て世代等との専門講座を実施したということでございます。

s が多いですが、伊藤委員から a ではないかということをお願いしています。伊藤委員、お願いします。

#### ○伊藤委員

s でも構わないですけども、単純に昨年までは意欲のある学生がマルシェとか王滝村とかしか出てきていなかったところに、今年度は学科ごとの地域連携が出てきたので、やっと学科ごとが動き出したのかなと思っていたんですが、先生方が s という評価でしたら、同じ s で結構です。

#### ○山沢委員長

ありがとうございます。では、伊藤委員のところを s にさせていただきます。では、評価としては s ということでよろしいですね。

次は No.42 でございます。就学困難学生への対応ということで、就学困難な学生を支援するための授業料免除、奨学制度のほか、私費外国人留学生に対する奨学制度に基づいて、支援を実施するというので、海外プログラムに入っているわけですが、入っているプログラムは、最初の「・」が JASSO の海外留学支援制度、二つ目の「・」が同じ JASSO で、給付型奨学金制度及び授業料免除、それから通常の奨学制度、授業料前期分を減免したと、これは大学の努力ですね。後期の減免、それから日本学生支援機構学習奨励費を私費外国人留学生が 1 名取れたと。それから、上記就学支援制度では、非該当の国の留学生に向けて、県立大が独自の減免制度で支援をしたというのが、授業料の半減が 9 人、寮費の全額免除が 2 人ということですね。それから、六鈴会、県立大の OB 会と県立短大の頃の OB 会の寄付と JASSO の助成金を財源として、100 円ランチ週間を何回か実施したということです。こういうふうなことで実施したということです。

山浦委員、お願いします。特にいいですか。

○山浦委員

特にはないです。

○山沢委員長

いろいろ細かく努力はしているということで、aの評価でよろしいですね。

次はNo.43です。学生の定期健康診断でございます。受診率が100じゃないんです。96.8%ということで、これは高いかどうか分かりませんが、そういうことでやっています。これはいつも問題になりますのは、なぜ100%にならないのだと。受診しなかった人に対してどういう対応をしているのかということが問題になっております。

今回はそのほかに、寮における集団生活への悩みのカウンセラーをつけたとか、そういうこともしているようでございます。

一応みんなaという評価ですので、aでよろしいのではないかと思います。

久保田委員から、お願いします。

○久保田委員

100%になっていないのですが、対応がなされていると書いてありますので、漏れのないようにしてもらいたいということです。

○山沢委員長

これは後からちゃんと進めているとか言っていましたね。一応確認のため、今年96.8%だったわけですから、3%という結構多いですね、30人ぐらい。どういうふうに対応したかちゃんと聞いてみてください。

では、aの評価です。3.2%の人の対応をどうしたかを聞いて、その答えも入れたいと思います。

次はNo.44でございます。大学食堂の事業者と連携して、学生の適切な食生活に配慮したようなメニューをつくったということでございます。安い100円ランチを何回かやったということで、これはaでよろしいですね。これは食堂のほうが大変な努力をしたということでございます。

次はNo.45です。キャリア支援のことでございます。1年生のキャリア支援、3年生の就職対策支援、4年生の進路決定支援を全学生に対して適切に行ったと。その結果、就職希望者の就職内定率が100%になったと。

その後いろいろあるわけですが、評価としましては、みんなsでございますので、評価としてはsでよろしいのではないかと思います。清水委員、コメントの御説明をお願いします。

○清水委員

就職率はすばらしい成果を収めていると思うのですけれども、就職先満足度というものに関して、早い時期に就活を終える決断をした学生は満足している可能性が高いけれども、遅い時期に決まった学生は必ずしも満足していないかもしれませんので、どの時期に就活

を終えたかがわかれば満足度を推測できるかもしれませんが。できましたら質的な面で、学生の満足度の確認ができればいいなと思ひまして、こういったコメントを書きました。

○山沢委員長

ありがとうございます。

○伊藤委員

No.45はsで構わないのですけれども、ここまでの県立大学評価のときに、微妙に目標の名前を変えてくることがあって、ここで就職率100%と書きながら、実績では就職内定率100%になっていて、一番下のところに、実就職率ランキングと書いてあって、一体どの数字が目標なのかが、前に海外プログラムの参加者のことを聞いたときに、途中から「参加を希望する学生が100%」と変わったんですけれども、実際に入学した学生に対しては全員海外留学と言っていたんですけども、途中から参加を希望する学生の参加が100%に変わっているんですが、ここは就職率が100%だけれども、就職内定率100%と書いてあって、実就職率ランキングは上位ということは100%ではないのかなと思ってしまって、そのあたりは、実際の目標に対する結果はいろいろな表現があってもいいのですが、就職率100%という目標値に対して就職率は幾つだったのかという書き方をしていただいたほうがいいのかなということです。

○山沢委員長

ということで、そういう意見で問い合わせるとどうなるか、聞いてみてください。今のコメントにちゃんと裏がつくように問い合わせ、できたらそういうコメントにしたいと思ひます。ありがとうございます。

次はNo.46です。夏休みに実施しましたインターンシップについてです。インターンシップですから、34社と団体、85人の参加。内訳は3年生が70人、2年生が12人、1年生が3人ということで、これで3年生の半分ぐらい、そんなに多くないですね。インターンシップを実施したと。これは今ぜひ積極的にいろいろやってほしいと思うのですけれども、全員aという評価なので、評価としてはaでよろしいかと思ひますが、清水委員、このコメントの御説明をお願いします。

○清水委員

3年生の様々な説明会の時期についてですけれども、4年生になる前の2月とか、そこで初めて行われるのは遅いのかなと思ひます。ここに書かれていること以上のことを質問したいわけではないのですが、時期的なものについてどうなのかと。最近では就職活動がすごく早くなってきていると感じていますので、今現在就職内定率100%ということなので、私が懸念することではないと思ひますけれども、ますます学生を力強くサポートしていただければと考えています。以上です。

○山沢委員長

分かりました。ぜひこれはコメントとして残したいと思ひますので、よろしくお願ひし

ます。ということで、aの評価でよろしいですね。

次はNo.47です。グローバルマネジメント学科の3年生に、インターンシップをやらせたのですが、それを選択必修の科目として単位認定したということです。これは言ってみれば当然だということで、これは中の手続の問題ですから、aということでよろしいですね。

次はNo.48です。これは食健康学科の4年生全員にキャリアセンター職員と個別面談をやった。教員とはやっていないのですかね。いろいろやって、結論としては、2年生に対してはキャリアデザイン講座というのを実施した。キャリアデザインとはどういうものかということをして4回に分けて講座をして参加させた。3年生に対しては5月に就職ガイダンスをやったと。27なので少ないですね、半分ぐらいですね。就職対策講座を開催した。これは1月だそうです。24人。

それから、全学年ではキャリアの相談会、どういうところで働いたらいいのか、どんなことを勉強したらいいのかということだと思いますが、そういうことを食健康学科の学生については、キャリアセンター職員と個別面談でこのようなことをしたということです。

これはaでよろしいですね。

次はNo.49です。食健康学科の臨地実習です。500時間を確保したと盛んに言っているわけですが、4年次30名全員が第37回管理栄養士国家試験を受験して全員が受かったと。あと前の年に受からなかった学生に対しても教員がサポートして、ちゃんと合格させたということでございます。

こういふことで、何で私はsにしたかと言うと、これは普通ではないかと思つたら、何か載つたのですね、管理栄養士国家試験合格100%というのが。文科省か何か情報雑誌に載つたというのでsにしました。

でも、伊藤委員はaということですので、お願いします。

#### ○伊藤委員

ただ素直に計画を読んで実績を見たら計画どおりだったかと、100%達成かと思つたのでaにしました。先生方がこの目標そのものが高くと御判断されて、達成する困難さからsということでしたら、私もsで私も結構です。

#### ○山沢委員長

ありがとうございます。それでは評価はsということで。しかしコメントもないのもおかしいですが、sという評価にします。ありがとうございます。

次はNo.50です。先ほどは食健康学科でしたが、次はこども学科です。4年次全員とのキャリアセンター職員との個別面談等の話でございます。そこにありますように、3年次は就職ガイダンス、4年次に就職対策講座をやっている。個別的には、横浜市私立園のガイダンスとか、上越教育大学の大学院のガイダンス、敵に塩ではないですかね。内定者の報告会、それから、公立保育士ガイダンス、こういうふうなことで就職支援を行ったということです。評価はaということですので、よろしいですね。

次に参ります。No.51でこども学科の話です。2、3年次に専門性をどう高めるかという話でございまして、専門指導で2年生のときにはこども学ゼミI、3年ではこども学ゼ

ミⅡということで、保育実習を入れています。2年次のときは幼稚園実習。4年生になると卒業研究ということで、幼稚園での教育実習という実習をちゃんとやったということです。これもaということでよろしいですね。

次は No.52、53 を飛ばして、No.54、オンラインによる学会発表等の話がありまして、大学側はやっているということでa評価ですが、伊藤委員からb評価で、ここ御説明をお願いします。

#### ○伊藤委員

毎年 No56 の科研費のところはcということで話題に上っていると思います。その前提として、やはり私は個人的に、ここまで教育のベースをつくるというのは、県立大学ではすごく注力されていることだと思って評価してきました。やはりここから、大学院を設置されたということで、研究という部分について先生方がどう取組を仕掛けとして進めているのかという中で、やはり研究成果の地域還元や、この間の紀要の話を御質問させていただいたのですが、学内でどのように発表へ向けて、あるいは研究へ向けて、仕掛けを、実際に個別面談をされたと聞いているのですけれども、じゃあそこで先生方がその結果をちょっとでもオープンにしていこうというような部分というのは、ホームページの大学紀要も私は端から先生方のを全部拝見しました。

やはりここ数年、コロナもあるとは言いながらも、オンラインの学会は通年にいつもと同じようにずっと開催されていくなどと思っておりますが、やはり先生方の研究発表は非常に少なかったという印象が、それはホームページに公開していないだけかもしれないのですけれども、されている先生は非常にされているのですけれども、紀要そのものも、この間申し上げましたように、食健康学科は過年度ここまで1回しか出ていないし、グローバルマネジメントは年2回しているのですが、載っている論文そのものはどんどん少なくなって、最新号は1個しか載っていないし、こども学科は年に1回は発行しているのですが、やはり研究の仕掛け、先生方の自分の考えを発表していこうという仕掛けが弱いのではないかなというところを感じておりまして、bという評価にさせていただきました。

ここでのホームページなどにおける具体的で分かりやすい形の情報発信が、もし今の記載のみならば、もう少し先生方が積極的に実際に御研究なさっているのを御発表いただいてもいいのかなと思いますし、あれが実態ならば少ないのではないかとこのところでbとしました。

でも、今のこういう仕掛けをつくっていただいたことはコメントに入れていただければ、a評価でも私はこのままでも構いません。

#### ○山沢委員長

ただいまのコメントをこちらでつくってお送りしますので、チェックをお願いします。具体的に伊藤委員がお考えになっている県民に向けた直接の研究発表とか、講演とかというのをもうちょっと積極的に。

#### ○伊藤委員

委員長がおっしゃるように、直接もそうですが、研究成果を地域還元するその手前で、

先生方が学会ですとか、学術誌ですとか、もっと手前で大学紀要ですとか、いろいろな形で先生方が計画するだけではなく、いろいろな発表をするというアクションが少し弱いかなと。大変難しいことだとは思っています。私も学会発表を1個やるために本当に大変だなと思っていて、そんな簡単とは思っていないのですが、研究に対する知の拠点ということ長野県において言われるものなので、では大学がどのようにその後発表とかアップしていくという、その部分を情報発信のところをどう作ろうとしているかが、いまひとつ見えないところでは。

○山沢委員長

私の経験からですと、文系の研究とはちょっと違うのですが、やはり大学院生が増えてくると、研究の発表という形で外へ出て行くのが増えてきます。そこが本学はまだまだ十分でないだろうと。そういう中の一つの証拠として、国に応募しろという研究費、科研費にあまり応募していないわけです。研究費がどうしても必要だというのは、若い人を学会に連れて行ってそこで勉強させるわけです。そのために金が要るのです。そういうところに、まだ本格的に県立大の教員の多くが困っていないのではないかとというのは、私も同じような考えであります。

そういうことで、今、伊藤委員がおっしゃったようなことをコメントにつけたいと思いますので、メモを送りますので直してください。それでaというところで。

では、No.52です。学長裁量経費でお金をあげるからと研究課題を募集したり、理事長裁量経費でお金をあげるからといろいろやっているのですが、それで幾つか少しは研究が盛んになってきているということです。やっていることは大変よろしいことなので、学長と理事長がお金を出すというのだから、ぜひそれに応募して研究を進めていただきたいということです。

清水委員、御意見が書いてありますが、説明をお願いできますか。

○清水委員

54のところにも関連しているのですが、専門性をもった研究者、教員の方がいらっしゃるの、それを広く地域に発信すれば、地域貢献、社会貢献等につながるのではないかと考えてこういうコメントを書きました。

○山沢委員長

ありがとうございます。鷹狩りの専門家がいたりしますね。いろいろいらっしゃるの、そういうものをもっと宣伝してもいいと思います。評価としてはaでよろしいですね。

次はNo.53です。学問領域を越えた研究や他大学等での共同研究ということを積極的にやってくださいということです。

山浦委員から質問いただいた件、これは分かりましたか。

○事務局

現在確認中です。

○山沢委員長

あと、清水委員からこの場合の研究費はどこから出ているのかということですが、これは分かっていますか。一応聞いておいてください。

○事務局

分かりました。

○山沢委員長

清水委員、この研究費の基について問い合わせますので。

○清水委員

分かりました。ありがとうございます。

○山沢委員長

内容としては、一応増えているということで、aの評価でよろしいですね。

No.54は、先ほど伊藤委員から厳しいコメントをいただきまして、こちらでそのコメントを清書してチェックしていただきまして、評価委員のコメントにちゃんとつけるということで、aということにしたいと思います。

次はNo.55です。これは長野県立大学における地域資料の収集及び活用に関する方針が最近できたのですが、やっと63冊集まったということです。山浦委員が、63冊はどんな資料かと聞いていて、県立大で県で公開する資料が63冊というのは信じられないけれども、始まったばかりでございます。そういうことで、これからも頑張るよにということでaで勘弁してください。

次はNo.56です。これはcです。全員がcですから。これは科研費です。申請率がもう率から何から言っても全然駄目で、これは学生の英語の実力と同じです。全く同じ現象が起きているということです。少しずつ良くなっていくでしょう。

私の意見を言わせていただきますと、科研費を申請しない教員は3分の1ぐらいいるのです。そういう教員が何をやっているのかというのを、ちゃんと金田一学長が把握していますよねということが一番聞きたいと思います。

清水委員、お願いします。

○清水委員

この間のヒアリングのときに伺って、すごく力を入れている教育へ時間を割かれるため科研費の申請が難しいということだったのですが、とはいえ、やはり科研費に申請することができるような、教員の研究に対するモチベーションと、それを後押しするような雰囲気、風土というものがつくられることを期待したいなと思っています。以上です。

○山沢委員長

ありがとうございます。ちょっと先走ったあれですと、ここの大学は、去年あたりから教員の業績評価で、学部長と学科長が教員の意見をよく聞いているのです。それで教員と

しては、今年は研究を一生懸命やるとか、教育を一生懸命やるとか、そういうことをどうも許しているような、そういうところですよ。でも、教員本人の考え方もありますから、そういうことで、トータルで大学として教育と研究のバランスが取れればいいでしょうから、ということもありますので、これは大きなことだと思います。コメントにはつけさせていただきます。ということで、cでよろしいですね。

○山浦委員

この間意見交換をしたときに、この大学は教育のほうにうんと傾斜しているから研究ができないのだと誰かがおっしゃっていましたね。その辺は全然分からないのですが、先生が受け持っているコマ数とかそういうものは、普通の大学とほとんど同じですか。

○山沢委員長

少ないです。文部科学省がつくっている大学ですから、研究と教育の両方をやらないといけないです。この辺は一回金田一学長と話をしないといけないですね。

次は No.57 です。ソーシャル・イノベーション創出センターが窓口になりまして、研究などの紹介もしている、中継ぎもしているというところでございます。長野市が運営するもの、お金を稼ぐのがありますけれども、研究ばかりではないでしょうけれども。中部電力との関係、KDDI との関係、それからエシカル消費推進事業と、いろいろなことを、教員では入っていけないところをソーシャル・イノベーション創出センターが窓口になってお金を受け取ったりして研究を進めているというところですよ。これはどこもやっていることですので、a でいいかなと思います。よろしいですね。

あと二つです。No.58 です。産学官連携です。58 は王滝村との包括連携や、各市町村や企業といったところと交流している、地域課題の解決に向けた産学官連携事業を展開しているというのがこの説明です。いろいろやっているのでもいいかなと思っているのですが、山浦委員から、地域が偏っていないか、理由はあるかということです。これは確かに見ると北信と言われているところです。大学やそういう機関がなくて困っているのは南信です。だからそちに優秀な駐在員を置いたらどうだということを言っているのですが、なかなか。まあ、一生懸命やっているということで、広くやっていますし、幾つかテーマも入れていますので、a ということでよろしいですね。

次は No.59、SDGs を切り口とした授業支援です。これは久保田委員から b の評価が出ていますので、御説明をお願いします。

○久保田委員

これは実績の読み方にもよるかもしれないけれども、三つ目の○で北信・木曾各3回、秋葉センター長が6回やったということなのかなということで、秋葉センター長以外の関わりはどうなっているのかという疑問もあって b にしたのですが。

○山沢委員長

これは回答をいただくので、評価は次回ということにしたいと思います。今、久保田委

員から説明がございましたように、全部秋葉センター長がやっているように見えるけれども、ほかもありますよねと。名簿を調べたらほかもいるのです。一応秋葉センター長がやってもセンターとかチームとか名前をつけているのか。そこをお願いします。聞いてから評価したいと思います。よろしいですね。

次、最後 No.60 です。寄付講座の受入れということで、日本ユニシスと KDDI からお金をもたらしているということで、2件でございます。もっているからいいかということで a の評価です。これはいいですね。

以上でございます。

#### 4 その他

##### ○事務局

事務局から御連絡を申し上げます。

次回委員会は、8月8日(火)13:30 から県庁で開催予定です。開催案内は後日御連絡いたします。

本日 Web と対面のハイブリッド方式で行いましたが、次回も今回と同様に行いますのでよろしくお願いいたします。以上でございます。

##### ○山沢委員長

予定したところまで行きました。もちろん評価が決まっていないところがありますので、問い合わせ、それを見ながら、一応私のほうで案をつくりまして、次回にここはこうなっているので評価をお願いしますというふうにしていきたいと思います。

次回も 96 までありますから。でもあと 35～36 ですね。

以上でございます。それでは、進行を事務局にお返しいたします。丸山さん、お願いします。

#### 5 閉会

##### ○丸山県民の学び支援課長

山沢委員長ありがとうございました。また委員の皆様方、本日は大変長時間にわたり御審議をいただきましてありがとうございました。

以上をもちまして、令和5年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会を終了いたします。

本日はありがとうございました。

(了)